

NEWSLETTER

No. 17

2007年5月25日

会長 澤田治美 事務局 〒594-1198大阪府和泉市まなび野1-1桃山学院大学 林 宅男 研究室内

TEL 0725-54-3131 (代表) FAX 0725-54-3202

psj-hayashi@kcc.zaq.ne.jp (林 宅男 URL: <http://www.soc.nil.ac.jp/psj4>)

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

★ 会員の皆様、お変わりありませんか。日本語用論学会 Newsletter 第 17 号をお届けします。さる 3 月 21 日に、第 29 回運営委員会が開かれました。この号は、そこで討議された内容をもとに編集されています。

★ 会長挨拶

澤田治美 (関西外国語大学教授)

新緑の候、会員の皆様にはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

昨年 12 月 9 日に桃山学院大学で開催された第 9 回大会では、ワークショップ、ポスターセッション、研究発表、講演 (特別講演、会長就任講演)、さらには懇親会にも大勢の会員の皆様をご参加くださり、大会は大成功のうちに幕を閉じることができました。

この大会では、多くの方々にご協力をいただきましたが、とりわけ会場を提供くださり、大会の成功のためにきめ細かなご配慮を賜りました桃山学院大学の林宅男先生をはじめとする桃山学院大学の関係者の皆様に心より御礼申し上げます。特に、林先生には、南デンマーク大学言語学科名誉教授 Jacob L. Mey 先生の招聘に際して、献身的な努力をしていただき、お礼の言葉もありません。

Mey 先生は、ご自身の語用論観に立って、

「言語行為」(もしくは、「発話行為」)の本質を理解するためには、談話における「場面」(situation)を重視することが重要だと力説されました。書物で名前を知っている学者がいたとして、実際にその人の警咳に接すると、不思議なことに、その人の著書がなんとなく身近に感じられる気がするのですが、講演をお聞きになった皆様にとって、Mey 先生がより身近に感じられたのではないのでしょうか。

今年は、学会発足 10 年目に当たります。これからの語用論学会にとってのキーワードは「国際化」であろうと思われます。文科省は、今、日本の学会の国際化を強力に推し進めようとしています。幸いにも、私たちの学会は、Mey 教授に続いて、今年の 7 月 29 日には同志社大学でチューリッヒ大学教授 Andreas H. Jucker 先生の講演会、さらには 12 月 8-9 日に関西外国語大学で開催される 10 周年記念国際大会では海外から一流の語用論学者を多数お招きして、10 周年記念にふさわしい大会になるように鋭意準備を進めております。会員の皆様の絶大なご支援・ご鞭撻を願ってやみません。

この 1 年間の活動で、特筆すべきは「談話会」の充実ぶりでなかりうかと思えます。談話会は事業委員会によって企画・開催されますが、高原脩事業委員長、林礼子副委

員長をはじめとする委員の方々の奮闘によって、「結合価理論による文の統語分析」

(小泉保先生)(第2回)、「言語学は分析対象をいかに拡大できるか—閉塞状況からの脱出に向けて」(児玉徳美先生)(第3回)、「認知レトリックと語用論—発話機能と意味の創発性の問題を中心に」(山梨正明先生)(第4回)と、3回開催されました。いずれの講師もその分野の第一人者だけあって、講演内容がすばらしく、聴衆に深い感銘を与えました。

国際化が「外的充実」と言ってよければ、談話会の活動は「内的充実」と言えるように思います。私たちの学会が着実に、古代ローマのことわざ“Festina Lente!”(「ゆっくり急げ!」)の精神で歩むことができるように、会員の皆様のご支援をお願いいたします。

さて、語用論は、言語を(刻々と変化する)コンテキストの観点から分析することを主眼といたします。私自身、言語現象について思いをめぐらせればめぐらすほど、言語はコンテキストとの相互作用によってのみ存在し得る(あるいは、進化し得た)のではないかという思いを強くしております。

このことを、he, she, theyなどの英語の照応代名詞の面から考えてみますと、1960年代のなかば以降、その生起条件は、「構成素統御」といった概念に基づく「束縛条件」によって分析されてきましたが、最近の認知言語学では、「参照点構造」、「視点」、「談話」などによってより認知的・語用論的に説明されています(その他、新グライス学派的な接近法もあります)。

興味深いことに、日本語の照応代名詞「かれ」は、本来、話し手・聞き手から離れたところにあるもの」を指す直示代名詞で

あったとされています(例は『新日本古典文学大系4 萬葉集』より)。

沖辺(へ)より満(み)ち来(く)る
潮(しお)のいや増(ま)しに我(あ)
が思(も)ふ君がみ船かもかれ

(巻第十八 4045)(下線筆者)

(沖のあたりから満ちて来る潮のように、いよいよますます私が大切に思うあなたのお船なのではないでしょうか、あれは。)

誰そ彼と問はば答へむすべをなみ君が
使ひを帰しつるかも

(巻第十一 2545)(下線筆者)

(あれは誰かと人が尋ねたら答えようがないので、あなたのお使いを帰してしまいました。)

日本語で、照応代名詞の「かれ」は直示代名詞「かれ」から発達したということは、代名詞の本来の働きは場面(=コンテキスト)指示であるということを示唆しているのではないのでしょうか。

コンテキストから切り離せないという意味で、自然言語は、本来的に「語用論的存在」であると言えるように思います。

では、12月8-9日、関西外国語大学でお会いするのを楽しみにしております。末尾ながら、会員の皆様が健康に恵まれ、ご研究の成果がますます上がりますようにお祈り申し上げて、ご挨拶とさせていただきます。

《事務局より》

★第9回大会総括

第9回大会の総括は以下の通りです。

1. 参加者 178人	(雑費, 消耗品など)	253,589
現会員 134人	人件費 (学生アルバイト)	271,700
新入会員 14人	旅費交通費	30,000
当日会員 30人	講師謝金 (旅費含む)	350,000
2. 懇親会参加者 56名	書籍代	9,450
3. 第9回大会運営費 (支出) 内訳	懇親会費	200,000
事務局費 (大会論文集印刷費含む)	合計	1,740,688
283,100		
人件費 (アルバイト代)		
104,000		
シンポジウム講師料 (交通費 含む)		
350,000		
懇親会費 200,000		

次年度繰越金 (普通預金残高) **4,462,329**

(2) 2007(平成19)年度予算

2007(平成19)年度予算

*大会が12月に実施されます関係上、当該年度の予算(案)を年次大会でお諮りしております。以下は第9回大会で承認されたものです。

★ 2006(平成18)年度の会計報告

(1) 2006(平成18)年度決算報告

本学会の会計年度の締めは3月末日になっていますが、3月21日開催の運営委員会で報告されました収支報告は以下の通りです。3月に発刊されました紀要の印刷費を含め、最終的な決算報告は7月の運営委員会の議を経て、会員の皆さまには今年12月の大会時にお諮りし、ご承認をいただく予定です。

平成18年度会計報告 (暫定版)

収入 前年度繰越残高	3,384,477
会費 (371口)	1,766,000
学会当日会員会費	71,000
プロシーディング売り上げ (参加費)	267,000
『語用論研究』等バックナンバー売り上げ	44,500
懇親会費	224,950
学会補助	445,000
普通預金利息	90
合計	6,203,017

支出	
印刷費 プロシーディング・プログラム	395,400
(『語用論研究』第8号含まず)	
郵送費	230,549
事務局諸費 (会議費, 学会当日諸費用	

収入	
会費 (5,000円×220 = 1,100,000)	
(4,000円×80 = 320,000)	
(6,000円×5 = 30,000)	
学会当日会員会費	30,000
学会参加費 (予稿集・プロシーディング含む)	270,000
『語用論研究』等バックナンバー売り上げ	20,000
合計	1,770,000

支出	
印刷費	800,000
(内訳) 予稿集・プロシーディング	(300,000)
『語用論研究』	(400,000)
プログラム	(100,000)
郵送費	150,000
事務局諸費	150,000
大会当日経費 (文房具, 講師料, アルバイト代, 会場費, 雑費, 懇親会費補助など)	520,000
旅費交通費	150,000
合計	1,770,000

★第10回大会(「世界大会」)発表募集のお知らせ

2007年度の第10回大会は、2007年12月8

日(土)、9日(日)の2日間にわたり、関西外国語大学(〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町16-1 072-805-2801(代))で開催される予定です。今年度の大会は第10回目となりますので、それを記念して「世界大会」と銘打って、2日間で開催することになりました。つきましては、発表件数が従来よりも一層多くなることも予想して、今年度は、締め切りを昨年度よりも10日程早め、8月20日とすることになりました。また、海外からの報告者・参加者を考慮して、今年度は、英語と日本語の2言語どちらかによる発表の受け付けをします(英語での発表に応募される方は、別紙及びHPをご覧ください)。尚、今年度も大会で発表された論文をとりまとめた「大会発表論文集」(プロシーディング)を大会後に発行いたしますので、会員の皆様には、どうか奮って発表に御応募いただきますようお願いいたします。

★大会「研究発表」、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」の応募要項(日本語での発表用)

第10回大会での「研究発表」、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」の応募要項は、以下の通りです(今年度は、メールによる原稿送付先がps.jconf@andrew.ac.jpに変わりましたのでご注意ください)。

***英語での発表に応募される方は、別紙及びHPをご覧ください。**

《応募要項》

1. 発表応募者は会員に限ります。応募者が会員でない場合、必ず応募と同時に[入会の手続き](#)をしてください(入会方法は、<http://wwwsoc.nii.ac.jp/psj4/>を参照)。

2. 選考及び研究発表の割り振りは運営委員会が行い、結果は応募1ヶ月以内に応募者に通知します。

3. 発表時間:

ア)「研究発表」:25分以内(別に質疑応答10分)

イ)「ワークショップ発表」:(一論文につき)15分以内(別に質疑応答5分)

ウ)「ポスター発表」:2時間程度(発表者は掲示物の前で待機)

4. 応募原稿の「発表要旨」のページ数(参考文献は文字数に含めません):

ア)「研究発表」:3ページ以内(1ページは25文字x30行とする)

イ)「ワークショップ発表」:(一論文につき)1ページ以内(1ページは25文字x30行とする)

ウ)「ポスター発表」:1ページ以内(1ページは25文字x30行とする)

5. 応募の締め切り:2007年8月20日(月)

6. 応募方法:出来るだけ電子メールでお願いします。どうしてもそれが無理な場合には郵便等でお届けください(電子メールで提出する場合は、郵便等での別送は不要です)。締め切り期限内に電子メールで受理した原稿につきましては、事務局から受理確認のお知らせをお送りします。

《電子メールの場合》

ア)件名を「研究発表応募」、「ワークショップ発表」または、「ポスター発表」のいずれかとしてください。

イ)応募原稿は、Microsoft Wordで作成し、添付ファイルで事務局アドレスまでお送りください。その際、ファイルは1)「個人情報ファイル」と、2)「発表要旨ファイル」の二つに分けて作成する。

ウ)二つのファイル名を、それぞれ、個人情報(X).doc、発表要旨(X).doc(Xには(代表)応募者の姓をいれる。例:個人情報(林).doc、発表要旨(林).doc)とし、一つの応募メールにこの二つのファイルを添付して送ってください。

エ)メールの本文には、添付ファイル1)「個人情報ファイル」の内容と同じ個人情報を貼り付けて送ってください。

1)の「個人情報ファイル」には、下記の様に、冒頭に「研究発表」、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」の何れかであることを明記し、その後、題目、氏名(必ずふり

がなをつける), 所属・職名, 住所, 電話番号・ファックス番号, 電子メールアドレスの順に書いてください。ワークショップでの発表は個人の他, グループでの応募も可能です。グループでの応募の際は, 一論文ごとの個人情報の他, グループ全体のテーマとグループの代表者を明記したものを, 一つのファイルに入れて送ってください。

発表形態: (「研究発表」, 「ワークショップ発表」, 「ポスター発表」の何れか)

題目: XXXX

氏名: XX XXX (ふりがな)

所属・職名: XX 大学 XX 学部 XX

住所: 〒xxx-xxxx XXXX.

電話番号: xxx-xxx-xxxx

電子メールアドレス: xxxxxx@xxxx

2) の「発表要旨のファイル」には, 冒頭に「研究発表」, 「ワークショップ発表」, 「ポスター発表」の何れかであることを明記し, 題目の後, 要旨を書いてください。グループでのワークショップ発表への応募の際は, 一論文ごとの題名, 発表要旨の他, グループ全体のテーマを明記し, 一つのファイルにまとめて下さい。

(「研究発表」, 「ワークショップ発表」, 「ポスター発表」の何れかであることを明記する)

題目: 「XXXX」

(例) 本発表では

.

《通常郵便の場合》

電子メールでの応募の場合と同じ要領で原稿を作成してください。個人情報については, A4 の用紙を用いて, 題目, 氏名 (必ず

ふりがなをつける), 所属・職名, 住所, 電話番号・ファックス番号, 電子メールアドレスを明記したものを 2 部 (コピーで可) 添付してください。発表要旨は, 別紙に, A4 の用紙を用いて, 冒頭に「研究発表」, 「ワークショップ発表」, 「ポスター発表」の何れかであることを明記し, 1 行開けて, 発表題目を明記し, 更に 2 行開けて発表要旨を書き, その原稿を 2 部 (コピーで可) 提出してください (名前等は発表要旨には書かないで下さい)。

7. 提出先

《電子メールの場合》: (今年度は変更になりましたのでご注意ください)

psjconf@andrew.ac.jp

《通常郵便の場合》:

〒594-1198 大阪府和泉市まなび野 1-1 桃山学院大学 林 宅男 研究室内 日本語用論学会事務局 TEL 0725-54-3131 FAX 0725-54-3202

(必ず, 封筒の表に, 発表形態に応じて, 「研究発表応募」, 「ワークショップ発表応募」或いは, 「ポスター発表応募」と朱書きしてください。)

★第 10 回記念大会講演・シンポジウム他について

今年度の大会では, 第 10 回を記念して以下の講演・シンポジウムの講師 (使用言語: 英語) の他, 海外からの懇話発表者も予定しています。

A. 記念講演講師 (Invited Plenary Speakers):

1. Teun van Dijk, Universitat Pompeu Fabra, Dep. De Traducclo Filologia, Barcelona, Spain
2. Jeff Verschueren, University of Antwerp, Stads campus, Faculty of Arts, Antwerp, Belgium
3. Ziran He, (何自然) Guangdong University of Foreign Studies, National center of Linguistics and

Applied Linguistics, Guangzhou, the
People's Republic of China

B. シンポジウム(仮題:Pragmatics in Wider Perspective)の講師

1. 池上嘉彦 (昭和女子大学)
2. 井出祥子 (日本女子大学)
3. Dr. & Prof. Ji-Ryong Lim (Teacher's College, Kyungpook National University, President The Discourse and Cognitive Linguistics of Korea)

★ 学会費の改訂のお知らせとお振込みのお願い。

本学会の学会費は昨年改定され、今年度は、一般会員：5,000円、学生会員：4,000円、団体会員：6,000円、となります。つきましては、このニューズレターとともに2007年度会費の振替用紙が同封されていますので、この用紙でお早めに振り込み下さいますようお願いいたします。

なお、振替用紙が、2枚入っている方は昨年度分の会費が未納の方ですので、学会の会計をご理解の上併せてお払い下さい。2年連続して会費を未納されますと、会員の資格を失効します。なお、住所・所属に変更や移動のある方は、事務局にメールあるいは郵送でご連絡ください。振り込み用紙の通信欄に書くのはなるべくお控えください(文字がかすれて読めないことがあります)。なお、行き違いがある場合はご容赦下さるようお願いいたします。

★ 『語用論研究』第9号投稿募集

学会誌『語用論研究』第9号への投稿を募集しています。多数の応募をお待ちしています。締め切りは、2007年8月20日です(以下の投稿規程は『語用論研究』第8号と本学会のホームページにも記載されています)。

《投稿規程》

1. 投稿は会員に限るものとする。(会員でない場合は、応募と同時に入会手続きをとること)
2. 投稿論文は未発表の論文であること。ただし、すでに口頭で発表したものなどに相応の修正・加筆を加えたものは、審査の対象になる。同じ年度の日本語用論学会大会で発表が予定されているものは、発表前の投稿を認めない。また、応募の際は、本人と分かるような書き方は避ける。
3. 使用言語は原則として日本語または英語とする。
4. 投稿は1年中受け付けるが、当該年度の号の最終投稿締め切りは、毎年8月20日、採否決定を10月末日、刊行を12月とする。
5. 採否は締め切り後1ヶ月以内をめどに決定する。
6. 枚数、書式など。
 - a. 原稿枚数：A4、横書き、15枚以内(注、参考文献を含む)。
 - b. 書式：1ページ、日本語の場合は32行38文字とする。英語の場合は1ページ、1行70ストローク、1ページ32行とし、フォントの大きさを小さくして大量のストローク数になることは避ける。注や参考文献の活字を小さくしない。ただし、図表の挿入は可能。
 - c. 原稿の1ページ目はタイトルのあと1行アケで氏名、そのあと2行アケでアブストラクト(英語で、1行70ストローク、8行以内)、さらに2行アケでキーワード、そのあと2行アケで本文を続ける。ただし、採否決定前の投稿論文そのものには氏名、謝辞を書かない(掲載決定後に編集委員会より指示する)。
 - d. 例文の前後は1行アケル。
 - e. 各節の前は1行アケル。

- f. 注は, 1, 2, 3 のように, 括弧を用いない数字だけとする。
- g. 見出しのサブセクション番号は, 1.1. のように, 数字の後にピリオドを置く。
- h. セクションの「はじめに」または「序論」は, 1. ではじめる。
7. 注は参考文献の前にまとめて付ける。
8. 参考文献 (参考文献, 引用文献という言い方はしない) の書式は以下の例にならう。
- Grice, H.P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Hooper, P.J. 1979. "Aspect and Foregrounding in Discourse." In T. Givon ed. *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*, 213-241. New York: Academic Press.
- Horn, L. R. 1985. "Metalinguistic Negation and Pragmatic Ambiguity." *Language* 61:1, 121-174.
- 小泉 保. 1990. 『言外の言語学—日本語用論—』東京:三省堂.
- 無藤 隆. 1983. 「言語とコミュニケーション」、坂本 昂 (編)『思考・知能・言語』(現代基礎心理学)、第7巻、161-189、東京:東京大学出版会.
- 野崎 昭弘. 1995. 「言葉と言葉の間」、『言語』、24: 2 (2月号)、62-69.
9. 参考文献に関する注意事項
- a. 参考文献は本文中で引用したもののみとする。
- b. 英語の文献, 日本語の文献を混在させて, アルファベット順に並べること (別々に分けない)。
- c. 共著者の場合, 英文は & を使わず and, 日本語は・ (なかぐろ) とする。
- d. 雑誌については日本語, 英語とも, 巻数, 号数, ページ数を明記する。
- e. 英語の文献名で, 語頭については, 内容語は大文字, 機能語は小文字とする。第1語の語頭のみ大文字で, あとは小文字という形式はとらない (上記8の英語の参考文献の書式参照)。
- f. 採否決定前の投稿論文に投稿者本人の著作を多数挙げて, 本人と分かるような書き方をしない。
10. 提出部数: 原稿は6部提出する。(コピーで可)。
11. 抜き刷りは20部を無料で贈呈する。それ以上の部数を希望する場合は学会事務局へ連絡すること (費用は執筆者の負担とする)。
12. 執筆者構成は初校のみとする。校正の際の内容にかかわる原稿への加除は認めない。
13. 氏名 (ふりがな), 郵便番号, 住所, 所属, 職名, 連絡先電話番号, FAX 番号, e-mail アドレスを記載し, その添付ファイルを下記のメールアドレスに送付する。
14. 送付先: 〒606-8501
京都市左京区吉田二本松町
京都大学 大学院人間・環境学研究科
言語科学講座
山梨正明 研究室
E-Mail:
yamanasi_at_hi.h.kyoto-u.ac.jp
(_at_を半角の@に置き換えて下さい)
TEL (075)753-6639/7893
Fax (075)753-6722
(「投稿論文在中」と封筒の表に朱書きのこと)
15. 掲載決定後に, 最終原稿を3部上記の住所に郵送し, 同時に最終原稿の添付ファイルを, 上記のメールアドレスに送付する。提出原稿は原則として返却しない。

★大会発表論文集 編集報告**(プロシーディングズ)**

昨年の大会では『日本語用論学会 第8回大会発表論文集』(創刊号)を発行することになりました。日本語用論学会では、2005年度より新たに、毎年大会で発表された論文をとりまとめ、大会後に論文集を発行することになりました。今回の論文集では、研究発表20件、ワークショップ発表12件の、合計32件で、第8回大会のほとんどの発表者が投稿して下さいました。論文集の発行によって、大会で発表された研究が多くの人に読まれ、語用論研究のますますの発展を願っています。『第9回大会発表論文集』(第2号)は第10回記念大会に発行する予定です。どうぞご期待ください。なお、国立国会図書館からISSN(国際標準 逐次刊行物番号)が付与されまして、次号以降も引き続き国立国会図書館(東京・関西館)にそれぞれ納本保存されることになりました。(編集担当:事業委員・余 維)

★事業委員会の活動報告

事業委員会では、学会事業の一環として研究集会と研究会(SIG)を開催、支援しています。第10回大会を12月に控え、これまでの活動を報告いたします。

(1) 研究集会

「談話会」「講演会」という名目で研究集会を定期的で開催しています。これまでに国内や海外から講師を招いて「談話会」を4回、「講演会」を2回開催しました。広領域にわたる語用論研究の分野の理解を深める場、研究の方法やヒントを得る場、そして、講演者と議論を交わし会員同士が交流する場として、興味や関心を同じくする会員が集まり知に満ち溢れた時間を共に過ごすことを目的にしています。これからも充実した集会にするため、会員の皆様のご協力をお願いいたします。また、テーマや講演者のご希望を事業委員までお寄せいただきますようお願いいたします。

<談話会>

第一回談話会

講演テーマ:「モダリティをめぐって」

講師: 澤田治美先生, 仁田義雄先生

演題:

澤田治美先生「英語におけるモダリティをめぐって」

仁田義雄先生「モダリティの諸相」

日時: 2005年7月2日(土) 15:30~17:30

場所: 関西大学 千里山キャンパス

岩崎記念館「多目的ホール1」

(4階)

第二回談話会

講師: 小泉 保先生

演題:「結合価理論による文の統語分析」

日時: 2006年3月21日(火) 15:00~17:00

場所: キャンパスプラザ京都 4階

第4講義室

第三回談話会

講師: 児玉徳美先生

演題:「言語学は分析対象をいかに拡大できるか—閉塞状況からの脱出に向けて」

日時: 2006年7月2日(土) 15:00~17:30

場所: 龍谷大学 大宮キャンパス

清和館3階ホール

第四回談話会

講師: 山梨正明先生

演題:「認知レトリックと語用論—発話機能と意味の創発性の問題を中心に」

日時: 2007年3月21日(水) 14:30~17:15

場所: キャンパスプラザ京都 4階

第3講義室

第五回談話会 (予定, 詳細は談話会案内をご覧ください。)

講師: Prof. & Dr. Lawrence Schourup (大阪府立大学)

演題: “Do Discourse Connectives Connect Discourse?”

日時: 2006年7月7日(土) 15:00~17:30

場所: 龍谷大学 大宮キャンパス

清和館3階ホール

<講演会>

第一回講演会

講師：Professor Emeritus & Dr. Jacob L. Mey
(University of Southern Denmark)

演題：Evolving Discourse: Speech Acts and Sequentiality

場所：桃山学院大学（第9回日本語用論学会年次大会時に招聘）

日時：2006年12月9日（日）15:30～17:00

第二回講演会（予定、詳細は講演会案内をご覧ください。）

講師：Prof. & Dr. Andreas H. Jucker
(University of Zurich)

演題：“No one can flatter so prettily as you do”:
Compliments and Compliment Responses in the History of English

場所：同志社大学 室町キャンパス寒梅館
203号室

日時：2007年7月29日（日）15:30～17:00

(2) 他学会、他研究会との共催

研究集会の他に、事業委員会は他の関連学会や研究会と語用論関係の講演やコンファレンスを共催しています。他学会との交流を通して会員の皆様の活動の場が広がることが主たる目的です。共催にすることで、参加費が免除されたり割引になるというメリットもあり、会員の皆様が参加しやすくなります。今後もこのような共催の機会を増やしていきたいと思っておりますので、情報を事業委員までお知らせいただきますようお願いいたします。

「共催講演及びコンファレンス」

第一回 講演ワークショップ後援

（甲南女子大学、エスノメソドロロジー・会話分析研究会と共催）

講師：Assoc.Pro. & Dr. Gene Lerner
(University of California at Santa Barbara)

演題：“Practice Does Not Make Perfect: Some Intervening Actions in the Selection of Next Speaker”

データセッション：

会話分析の手法のチュートリアル

日時：2003年9月20日 13:00～17:00

場所：甲南女子大学

第二回 講演、コンファレンス講演

（予定、詳細は講演案内をご覧ください。）

（JALT大阪支部、JALT Pragmatics SIG, the GILE SIG, the CUE SIG と共催）

講師：Prof. & Dr. Janet Holmes (Victoria University of Wellington, New Zealand)

日時：2007年10月6日（土）、7日（日）

一日目

演題：“Gender and Leadership: Some Socio-Pragmatic Considerations”

日時：2007年10月6日（土）18:00～20:00

場所：大阪駅前第3ビル21階 テンプル大学ジャパン大阪校

二日目

コンファレンスタイトル：Gender and Beyond

イベント内容：

研究発表とパネルディスカッション
Various Presentations and Panel Discussion

日時：2007年10月7日（日）10:00～18:00

場所：関西大学 千里山キャンパス岩崎記念館

(3) 研究会グループ (SIG)

昨年募集いたしました研究会グループの活動が4月から始まっております。昨年は5件の応募がありましたが、3月21日の運営委員会で、3件が承認されました。ご応募の際には、ホームページにあります規定をご一読いただきますようお願いいたします。現在活動中の研究会は以下の通りです。研究の成果を年次大会でグループ発表していただく機会を設けることを検討しています。ぜひご応募いただきますようお願いいたします。

研究会グループ名：「モダリティ研究会」
研究題目：「モダリティの意味論と語用論」

研究会グループ名：「関連性理論集会」
研究題目：「日本語研究と関連性理論」

研究会グループ名：「話し言葉の分析研究

会」

研究題目：「話し言葉の語用論」

★「日本語用論学会第5回談話会」のお知らせ

この度、第5回「談話会」を下記の要領で開催することになりました。この談話会は、1-2名の講師をお招きして最近のご研究について講演をしていただき、その後、ディスカッションを通して、それぞれの分野の理解を深めることを目的とおこなうものです。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

記

講師：Prof. & Dr. Lawrence Schourup (大阪府立大学)

司会：高原 脩

日時：7月7日(土) 15:00~17:30 (受付14:30~)

場所：龍谷大学 大宮キャンパス 清和館3階ホール

演題：“*Do Discourse Connectives Connect Discourse?*”

概要： Most research on so-called discourse connectives begins from the assumption that such expressions signal coherence relations between hierarchically organized units of discourse. However, an alternative approach to these expressions has also emerged. The latter approach does not assume that, in their basic capacity, discourse connectives indicate relations between discourse units, or even that they function in relation to something called discourse at all. Advocates of this approach, exemplified in the work of relevance theorists like Diane Blakemore, argue that coherence-based analyses of discourse connectives fail to characterize correctly the contribution such expressions make to the process of utterance interpretation, and that these analyses therefore lack a cognitive basis. On this alternative view, coherence relations are not seen as cognitively real entities, and intuitions of connectivity and discourse structure are regarded as being consequent on the way in which texts are

processed in the search for optimal relevance.

In this talk, I will sketch the arguments and assumptions that underpin these divergent approaches to discourse connectives – and, more broadly, to discourse markers – and illustrate the differences between the two approaches by examining how they can be applied to the task of characterizing ostensibly connective uses of the English word *now* (e.g., ‘Now, I disagree.’). *Now* is of particular interest in this regard because it is widely viewed as demanding treatment in terms of discourse-structural elements such as ‘topic’ and ‘subtopic.’ *Now* therefore poses a challenge for the relevance-based approach, in which such elements play no role.

In illustration of the coherence-based approach, I will introduce two important prior studies of *now* by Schifffrin (1987) and Aijmer (1988). Though differing in specifics, both studies make a central appeal to the notion of coherence and to hierarchically organized units of discourse. To illustrate the relevance-based approach, I will attempt to develop a cognitively-based formulation of the meaning of *now*, which does not refer to coherence relations or discourse units, and in which any effect *now* has on perceptions of discourse structure and coherence is seen as entirely derivative. I will then compare the coherence-based and relevance-based approaches in relation to data which were not adequately accounted for in previous studies of *now*, and which pose particular problems for analyses in terms of coherence.

講師プロフィール：Lawrence Schourup is Professor of Linguistics at Osaka Prefecture University. He received a Ph.D from Ohio State University (1982) and has published widely in the areas of pragmatics, poetics, stylistics, and phonology. His work within pragmatics has focused primarily on the semantics and pragmatics of discourse markers and related expressions. His dissertation, *Common Discourse Particles in English Conversation* was published by Garland Press in 1985.

お問い合わせ先：日本語用論学会事務局
psj-hayashi@kcc.zaq.ne.jp (林宅男)
= 594-1198 大阪府和泉市まなび野 1-1

桃山学院大学 林 宅男 研究室内
TEL 0725-54-3131 (代表)
FAX 0725-54-3202

★「日本語用論学会第2回講演会」のお知らせ

第2回「講演会」を下記の要領で開催いたします。講演会の開催は不定期になりますが、事業委員会では今後このような機会を増やしていく予定です。多くの皆様のご参加をお待ちしております。今回は、チューリッヒ大学（スイス）の Andreas H. Jucker 先生をお招きする機会ができました。皆様のご来場をお待ちしております。

講演者 Prof. & Dr. Andreas H. Jucker
演題 “No one can flatter so prettily as you do”: Compliments and compliment responses in the history of English
司会 高司正夫先生

場所 同志社大学 室町キャンパス寒梅館
203号室（今出川キャンパス西門から向かいの新校舎）

日時 7月29日（日）15:30～17:00
（15:00から受付）

Jucker 教授のプロフィール

Andreas H. Jucker has been Professor of English Linguistics at the University of Zurich since 2002. Prior to that he taught at the Justus Liebig University, Giessen, where he was dean of the Department of English from 1996 to 1998 and founding dean of the School of Language, Literature, Culture from 1999 to 2001. As a visiting professor he also taught at the Adam Mickiewicz University in Poznan (1989/90), at the University of Wisconsin in Milwaukee (1994) and at the University of Wisconsin in Madison (1996).

His current research interests focus on historical pragmatics, cognitive pragmatics and hypertextlinguistics, but he has also published on various aspects of the language of mass media, electronic research tools in linguistics and on the syntax of Middle English. Publications include *Social Stylistics* (1992), *Historical Pragmatics* (ed., 1995), *Discourse*

Markers (co-ed., 1998), *Current Issues in Relevance Theory* (co-ed., 1998), *Orientierung Anglistik/Amerikanistik* (co-authored, 1999), *Historical Dialogue Analysis* (co-ed., 1999), and *History of English and English Historical Linguistics* (2000).

講演会後、先生を囲んで懇親会を持つ予定です。こちらへのご参加もお待ちしております。

場所：ホテル京阪 13階美濃吉

時間：18:00～20:00

会費：5,000円（税，サービス，1ドリンク込み，追加ドリンクは個人負担）

お問い合わせ先：日本語用論学会事務局
psj-hayashi@kcc.zaq.ne.jp（林宅男）
= 594-1198 大阪府和泉市まなび野 1-1
桃山学院大学 林 宅男 研究室内
TEL 0725-54-3131（代表）
FAX 0725-54-3202

★「第二回共催講演会及びコンファレンス」のお知らせ

事業委員会では、他の関連学会や研究会と語用論関係の講演やコンファレンスを共催しています。今回は JALT 大阪支部の会員でもある本学会会員から案内をいただいたもので、3月21日の運営委員会で共催が決定されました。講演者は、ビクトリア大学（ニュージーランド）の Janet Holmes 氏で、二日にわたって講演とコンファレンスがあります。JALT から講演会の開催のお知らせと研究発表の募集が送られてきましたので、以下にお知らせいたします。学会員の皆様には参加費の割引がありますが、詳細はまだ決まっておりません。情報は JALT と本学会 (PSJ) のホームページで順次更新されますのでご覧ください。

講師: Prof. & Dr. Janet Holmes (Victoria University of Wellington, New Zealand)

日時: 2007年10月6日(土), 7日(日)

一日目

演題：Gender and Leadership: Some Socio-Pragmatic Considerations
 日時：2007年10月6日(土)18:00～20:00
 場所：大阪駅前第3ビル21階
 テンプル大学ジャパン大阪校

二日目

コンファレンスタイトル：
 Gender and Beyond
 イベント内容：研究発表とパネルディスカッション Various Presentations and Panel Discussion
 日時：2007年10月7日(日)10:00～18:00
 場所：関西大学 千里山キャンパス岩崎記念館

Saturday, October 6th-Sunday 7th, 2007
 JALT GALE-SIG Two-day Conference
 This event is proudly co-sponsored by the Pragmatics SIG, the GILE SIG, the CUE SIG, the Pragmatics Society of Japan, and the Osaka Chapter.

Gender and Leadership: Some Socio-Pragmatic Considerations
 Speaker: Professor Janet Holmes
 Day 1: Saturday, October 6th, 2007
 Time: 18:00～20:00
 Location: Osaka Ekimae Bldg. 3, 21st Floor, 1-1-3-2100 Umeda, Kita-ku, Osaka
 Venue: Temple University Japan, Osaka (map to be posted later)

Gender and Beyond
 Event: Various Presentations and Panel Discussion
 Day 2: Sunday, October 7th, 2007
 Time: 10:00 – 18:00
 Location: 3-35, Yamate-cho, 3chome, Suita-shi, Osaka
 Venue: Kansai University, Senriyama Campus, Iwasaki Kinenkan
 Map:
<http://www.kansai-u.ac.jp/English/mapsenri.html>

Description: The opening lecture, “Gender

and Leadership: Some Socio-Pragmatic Considerations,” will be given on Oct. 6 by Janet Holmes (Linguistics Chair, Victoria University of Wellington, New Zealand). Professor Holmes is a Fellow of the Royal Society of New Zealand and teaches Sociolinguistics, specializing in language in the workplace, New Zealand English, and language and gender issues. She was Director of the project which produced the Wellington Corpus of Spoken New Zealand English, and is currently Director of the Wellington Language in the Workplace project. She has published on a range of sociolinguistic and pragmatic topics, including New Zealand English, New Zealand women's usage, sexist language, pragmatic particles and hedges, compliments, apologies, disagreement, humour and small talk, and other aspects of workplace discourse. Her most recent books are the Blackwell Handbook of Language and Gender, co-edited with Miriam Meyerhoff, and Power and Politeness in the Workplace, co-authored with Maria Stubbe.

For more about Professor Holmes:
<http://www.vuw.ac.nz/lals/staff/janet-holmes/holmes.aspx>

On Sunday October 7 various paper presentations/discussions will be held as well as a closing panel discussion led by Prof. Holmes.

For more details see: <http://gale-sig.org> or <http://www.Osakajalt.org>

Call for papers: Deadline June 15, 2007. Participants are invited to submit proposal abstracts for demonstrations, papers, workshops, demonstrations, and a panel discussion. Preference will be given to proposals that fit the overall conference theme of Gender and Beyond and/or meets the aims of one of the participating SIGs. Different perspectives on the conference theme are encouraged. Submissions that do not deal directly with the conference theme are also welcome for consideration.

Types of Presentations

Papers

30-minute lecture-style presentations.

Presenters should report on research or practice and allow at least 10 minutes for questions and discussion.

Workshops

60-minute hands-on sessions during which participants engage in a series of carefully structured activities. At least 45-minutes should be allocated to audience participation. Workshops that put “theory into practice” and generate ideas or materials that could be adapted for immediate classroom-use are preferred.

Demonstrations

45-minute demonstrations of innovative teaching techniques, lessons or activities.

Participants should allow for audience participation and discussion.

Panel Discussion

15-minute per person, lecture-style panel presentation. Presenters should report on research or practice related to the main conference themes of gender and/or leadership and be prepared for questions and discussion (accompanied by other panel presenters).

All proposals will be anonymously vetted. Abstracts of all presentations accepted by the Program Committee will appear in the conference program. 2 copies of the abstracts should be sent by e-mail as attachments in plain text, Microsoft Word or PDF format. Attach one abstract with the name, institution, phone number, and e-mail address of the main presenter (in case of joint presentations). Attach one abstract with only the title (50 characters maximum) and the contents (250 word maximum). The subject line should say Submission for ___ SIG/Chapter (where ___ is the appropriate abbreviation) or Submission for other (if the submission is not related to one of the participating SIGs/Chapters). Multiple

submissions are acceptable but should be sent as separate e-mails. All submissions to be sent to <galesubmissions@yahoo.com>.

Cost: To be announced.

Key Dates:

Deadline for submission of proposals: June 15, 2007

Notification of acceptance: July 21, 2007

Details of preliminary schedule: July 28, 2007

Any questions regarding the conference should be forwarded to

<galesubmissions@yahoo.com>. The subject line should say Questions.

★ 語用論関係新刊書紹介

井出祥子 (2006) 『わきまへの語用論』東京: 大修館書店.

小泉保 (2007) 『日本語の格と文型- 結合価値理論にもとづく新提案』東京: 大修館書店.
テニエール, ルシアン. (2007) 『構造統語論要説』小泉保訳. 東京: 研究社.

Arnovick, L. K. (2006) *Written Reliquaries: The Resonance of Orality in Medieval English Texts*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.

Bardovi-Harlig, K. & J. C. Felix-brasdefer. (eds.) (2007) *Pragmatics and Language Learning: Conference Proceedings. Vol.11*. Honolulu: Univ. of Hawaii Pr.

Bernini, G. & M. L. Schwartz (eds.) (2006) *Pragmatic Organization of Discourse in the Languages of Europe*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.

Busse, B. (2007) *Vocative Constructions in the Language of Shakespeare*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.

Caffi, C. (2006) *Mitigation*. Amsterdam: Elsevier Science.

Fetzer, A. & K. Fischer. (eds.) (2006) *Lexical Markers of Common Grounds*. Amsterdam: Elsevier Science.

Ginzburg, J. (2007) *Questions, Queries, and Facts: A Semantics and Pragmatics for Interrogatives*. Stanford: Stanford Univ. Center for the Study of Language and

- Information.
- Hinrichs, L. (2006) *Codeswitching on the Web: English and Jamaican Creole in E-mail Communicatin*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.
- Hubler, A. (2007) *The Nonverbal Shift in Early Modern English Conversation*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.
- Suzuki, S. (ed.) (2007) *Emotive Communication in Japanese*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.
- Taavitsainen, I. & S. M. Fitzmaurice. (eds.) (2007) *Methods in Historical Pragmatics. VI. Ed*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.
- Unger, C. (2007) *Genre, Relevance and Global Coherence: The Pragmatics of Discourse Type*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Verschuereen, J. (2006) *Handbook of Pragmatics. 2006 Installment. Unbound Ed*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.
- Wärnsby, A. (2006) *(De)coding Modality: The Case of Must, May, Måste and Kan*. Lund: Lund University Pr.
- Warren, M. (2006) *Features of Naturalness in Conversation*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.
- Zúñiga, F. (2006) *Deixis and Alignment: Inverse Systems in Indigenous Languages of the Americas*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.

★ 編集後記

5月の連休明け(7日から11日の4日間)にカナダのケベック州トロアリエールのケベック大学で、州、大学、フランス語普及協会(Association francophone pour le savoir)等の主催の75^e Congres de L'ACFAS: L'esprit en Mouvementが開催されその一環の事業として9日~11日の3日間、"Attitude et Actions dans le Discours""Colloque International en Hommage a Raymond Klibansky"という国際研究者集会がありました。延べ30名程度の小じんまりとした集会でしたが、言語哲学、数学、論理学、コンピュータ科学、言語学といった多方面からの研究者が集い「ディスコースにおける行動と心的態度」という共通テーマについて真剣かつ活発に討議が行わ

れました。討議の中心はD. VandervekenのLogic of Attitudeという新たな枠組みに対する評価とその応用についてでありました。彼は合理的(rational)かつ知的(intelligent)な談話において遂行される発話の心的態度を願望(Desire)、信念(Belief)、意図(Intention)の3つの構成要素に還元し、すべての態度と行動との関係を論理的に説明する枠組みを提示することに成功しました。彼の枠組みは理性・知性に重きを置く談話の分析に適しているため、ゲーム理論研究者や最適性理論研究者、さらには、戦略論研究者の支持を受けています。従いまして、彼の言語行為論は現在では、行動理論(action theory)やゲーム理論と融合した形式談話理論という巨大な人間行動理論に成長したのです。しかし、彼の枠組みは、当面は、人間の社会的相互行為や情的コミュニケーションの分析にはそのままでは用いることができないでしょう。そのことは彼の「談話の論理」(Vanderveken, 1994, 1999, 2002)が、その記述対象である談話を「知的談話」に限定していることから明らかです。彼の理論で、人間の談話行為の分析するには、少なくとも情的談話記述のための補助的仕組みが必要です。私は、知的に非論理的でも、情的には“(それなりに理屈があるという意味で)論理的”である日常の談話の分析の必要性を集会で訴え、「知」と「情」を記述できるパラレルな枠組みを提案し、その方向での「談話の論理」の修正を求めました。しかし、逆に私の枠組みの「知」への融合を求められました。残念ですが、当面、コンピュータ科学者を除いてVandervekenグループの研究者の多くは“情の論理”という概念を受け入れがたいようです。

私は、これからの語用論の研究は、すでに一部で始まっていますように、知の研究から情意の研究にシフトする必要があると考えています。情的コミュニケーションの研究に一人でも多くの研究者が取り組まれることを願っております。

(広報委員長 久保進 記)